

## 『結論として』

なにとはともあれ、歴史は有機物なる生物が、無機物たる自然の暴虐に痛めつけられて来たことを化石、遺跡、廃墟、或は神々の変遷、権力の興廃、そして進化論、マルクスと、物質的にも精神的にも、その落差を埋めようとした、有機物の宿命的延命策の結果を物語っているといえないだろうか。

だとすれば、理論的には人工衛生が飛んだことによって、落差は消滅したことになる。勿論、宇宙の一部を銀河系宇宙と呼ぶように、無機物の世界は解釈のしようにもよるが、広大だ。しかしこの場合は、地球という対人間的関係の無機物に限定した場合の意味である。そして、その無機物に近づくチャンピオンは、常に科学であった。ガリレオ、コペルニクス、マルクスなど、歴史を進化させたものが常に科学であり、なんらかの意味で、例えば宗教さえもが、科学が使用されていたことを物語っている。

そして、科学は分業化、即ち専門化して発達して来た。その傾向は資本主義産業においても顕著で、なにも、いまさら産業革命を持ち出す必要はなかろう。その分業化は益々進み、サラリーマンすら、それも知識階級指導層すら、パンチャーとなり、労務対策の分裂屋、資金屋、総会屋、はてはアイデア会社の出現となっている。そこでは部品化することによってのみ、生きる論理が信じられている風潮だ。その結果が精神安定剤時代と呼ばれ、正常さは、むしろ精神病院の中にしかないような状態だ。何故なら患者には医者が狂っていると判定した眼、即ち基準があるから、まだしも安全ということだ。

その二次的回復策として、薬否定運動、例えばヨガ普及運動、日立の日曜大工機械販売政策運動の一環としての、家庭に奉仕しながらの筋肉労働によるオヤジのストレス解消など、生物本能の一つ、回復への欲求とみてさしつかえなかろう。

しかし、同じ機械によるといいながらも、人工衛星の出現は、いっきよに総合化の哲学を提出したとみなしていいのではなかろうか。

その一の理由は、人間が乗って行かねばならぬという、ただ簡単な理由だ。

火星に住む人間、金星に住む人間、素朴に考えて、まだ人間という名のつく限り人間だろう。しかし、どうも火星では胴が邪魔になってと、コロンブスの勇気と発見によって、胴を除いた人間が出現し、伝統を守る人間を食ってしまった時、その食った人間は、果して人間であるだろうか。そして現在の倫理観念では人間を食うことは許されないが、人間の原型としてサジスト的なものがあれば、一種の流行として、或は最高の享楽として、

人食いの習慣が復活しないと、誰が断言出来るだろうか。いや、それはオーバーとしても、現実に迫られた問題として「人間とはなにか」と科学的に、また生物学的にも研究するというより規定する。即ち「人間とは、こういうものであるべきだ」「何故なら、人間を食うということが悪であるならば……」というように、ここでは生存が第一義ではないのだ。人間、いままでの歴史は、生存一義の原則によって綴られたが、ここでは、規定することによってしか、逆に生存すら許されないまままでと、逆の立場になったのだといってよいのではなかろうか。だから、生産手段は益々細分化されてゆくと同時に、宇宙を飛び廻るに必要な総合化が強制されて、それは、あたかも暗夜に輝く太陽のように象徴的だ。それは、明らかに理想だ。その証拠とってはおかしいが、二大陣営の片方には負けるが、当面、人工衛星を飛ばさなかったからといって、人間が滅亡することはないと断言出来るだろう。それに反して、コレラ菌に勝たなければ滅亡するだろう。

別言すればペダンチックな時代になってもいいということだ。現実に生存しようとする第一命題が二次というところちょっとおかしいが、とにかく、本命ではなくなって、趣味の時代になった。そして、趣味だからとそのままになっていけば人間を食う趣味まで発生する珍妙な世界が出現するのだ。

要するに、どんな無責任なことも出現出来るのだ。そして、その無責任さの責任が、そのまま自分自身の存在を規定する。即ち意識化された世界だ。その点、いままでは、生存という競争に、どういう考えであろうとも加わらなければ存在し得なかった。別言すれば、表面的民族意識、法律、規則規制に従ってゆけば、形にはまった市民、あるいは芸術家として生きてゆけた。または、一生無意識で死んでゆかれた時代であった。ということが出来る。それは、とりもなおさず、人間自身のあり方には、無関心で競争だけしておけばよかった。では人間の原型に対するものはといえば、極く一部の人間が考え出した、神の概念で代用されていたとっていいだろう。だから、ある意味では神の概念は、人間の弱者としての、悲鳴の形式化されたものだったのだろう。

結論をいそぐと生存が第一義でなく、存在がのしあがり、弱者の悲鳴でなく、日常性が神にとって代わる時代となり、すべてが総合化され人間という、目標物の再原型が必要となった時代だ。職工も女工さんも無差別に徹底的に意識化された時代なのだ。その時、絵画はどうあるべきか。「絵画とは」「彫刻とは」「見よ」「繰れ」というより、原理的になり原則的になり、それ以上に倫理的になるだろう。少なくとも、私自身は倫理的でなければならぬと思う。その仮説として——命令する芸術英雄たちの大集会という名称による運動を推し進めてゆくことを表明したわけである。こういう表明を試みながらも、雨のモリ、乳のみ子が泣き叫ぶ現実とのへだたりの義務を気にしながら……。